

# 「オネエ所長の調査ファイル」 # 2 3

山崎浩治

1

「仮装なんかしてどうしたんです、所長？ ハロウィンにはまだ早いですよ」

「あたしは年中ハロウィンなの！ って、これは仮装じゃなくて、女装！ 今日のテーマは妖精よ。このリボンのシュシュなんて森の妖精がつけていそうでしょ？」

「何が妖精ですか！ オレは墓場からさまよい出た妖怪の仮装だと思いましたよ！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢駅構内で尾行中だ。この日の市山は胸元にレースをあしらった白のひざ丈ワンピース姿、まぶたにはふわふわのつけまつげと花のペイントが施され、まばたきをするたび花が現れるという悪夢のような光景だった。そんな市山を「何何、このおっさん！ ヤバイ、まじウケる！」と学校帰りの女子高生たちが取り囲み、満更でもない市山は握手をしたり、一緒に写メまで撮ったりしている。

今回の依頼人は金沢市に住むパート主婦の聡子(42歳)である。「70歳を過ぎて再婚した父が病気で倒れたが、後妻は介護をしようとしなない。父の財産が心配」との相談を受け、後妻の敏子(67歳)を尾行しているのだった。

依頼人の父・貞雄(71歳)の先妻は50代後半でがんを発症。手術しては再発の繰り返しで最後は骨にまで転移し、3年前に亡くなった。以来、貞雄は一人暮らしを続けていたが、1年前、趣味の集まりで知り合った敏子と周囲の反対を押し切り、結婚した。

その貞雄が脳梗塞で倒れたのは3カ月前だ。買い物から帰宅した敏子がキッチンで意識を失っている貞雄を発見、救急車を呼んで病院に搬送し、どうにか一命は取り留めたものの、後遺症で右半身に麻痺が残り、現在も入院する病院でリハビリを続けている。ところが敏子は病院に一切姿を見せなかった。

原色の洋服を着た敏子がキャリーバッグを颯爽と引きながら、同年配の女性たちと北陸新幹線に乗り込んでいく。ホームの隅で見送り客を装った市山と透が言葉を交わす。

「彼女はやはり、財産目当てで結婚したんですかね、所長」

「必ずしもそうとは限らないわ。後妻も2年前に夫を亡くしてる。きょうびは一人の寂しさから熟年結婚する人も多いのよ」

2

「後妻はカラオケ仲間と温泉旅行に行ったり、高級レストランで食事したりして毎日、派手に遊んでたわ。夫が入院中だというのに、いいご身分ね」

数日後、市山は依頼人を「金沢プライベート・リサーチ」に呼んで調査結果を報告している。聡子は不機嫌な表情を隠そうともせず、報告に耳を傾けていた。

「ただし、お父様の自宅や土地の名義を自分に書き換えていないし、いまのところ病院の入院費用もきちんと振り込んでいる。まあ、預貯金の方は使い込んでいるかもしれないけどね。もっとも彼女は前夫が亡くなるまで、平凡な専業主婦を長く続けてきた。それほど悪辣なことができる

とは思えないわ」

聡子が怒りを含んだ口調で言った。

「父は退院後、自宅で療養したいと言っていますが、あの女は『夫の介護をするつもりはない。面倒を見るというなら離婚する』と言ってるんです」

「それはあなたにとって願ってもないことじゃないの？ さっさと離婚届にハンコを押してもらいなさいよ」

「それが……」と聡子が言い淀む。

貞雄は再婚前、「娘の遺留分を侵害しない範囲で、敏子に財産を相続させる」という内容の遺言書を作成していた。貞雄の財産は家、土地、預貯金、株券などで約3000万円。一人娘である聡子の法定相続は2分の1で、遺留分はその半分だから、聡子の相続分は4分の1まで激減していることになる。

「遺言書で`個人名、を指定しているところなんて、なかなか芸が細かいわね。それなら仮に離婚しても、後妻はお父様の財産を手に入れられる……」

「昨日今日、再婚した女が父の財産のほとんどを持っていくなんて、とうてい承服できませんよ！」

「入院中のお父様は意思表示に問題なかったわよね」

「はい。言語障害はありません」

「だったら、いますぐお父様に頼んで遺言書を作り直しなさい。複数の遺言書がある時は一番新しい日付の遺言が有効になるから」

### 3

仕事一筋のサラリーマンだった夫は定年退職後ほどなく、狭心症であっけなく逝った。残された敏子には亡夫の遺族年金と自分の年金を合わせて毎月20万円を超える収入があり、贅沢はできないけれど、生活に不安はなかった。とはいえ、金沢市内に所帯を持つ一人息子はめったに実家に帰ってくることはなく、夜になると話し相手はもっぱらテレビだけだ。病気で寝込んだ時、看病してくれる人がいない。このまま一人で死んでも誰も気付いてくれないのだろうなと思うと、孤独感が募った。

そんな時、近所のカラオケ教室で妻に先立たれた貞雄と出会う。一人暮らしの無聊から老人ホームへの入居を検討しているという貞雄に頼まれ、夫婦のまね事をして高齢者施設の見学に赴く。その後、高級レストランの食事で意気投合、やがて居酒屋などでデートを重ねるうち、自分にはもう無縁と思っていた恋のときめきがよみがえった。それは貞雄も同じだったらしく、「結婚したい」とプロポーズされたのは知り合って2カ月目、泊まりがけの旅行をした夜のことだった。

大手企業に勤めていた貞雄の年金額は亡夫とほとんど変わらない。嫁に行った一人娘がいるものの、面倒な親戚付き合いもないという。一人暮らしよりも所帯を持った方が生活費を抑えられるし、自分の年金を趣味や貯金に回せるという計算もあって、即座に結婚を承諾した。「一緒に

寝ているだけで心が安らぐ」と貞雄がセックスを求めてこないことも決断を後押しした要素だったろう。

しかし、互いの子どもたちは結婚に強硬に反対した。貞雄の娘は「お母さんがあれだけ苦しんで亡くなったのに、何年も経たないうちに再婚するなんて！ どうしても結婚するというなら、親子の縁を切る！」と息巻き、敏子の息子も「年相応に茶飲み友達の付き合いをしてろよ。それでも寂しいなら一緒に暮らすだけでいいじゃないか。何もその年で籍まで入れなくたって。年寄りらしくやれ」と総スカンを食う。聡子はやがて「父の面倒を見てくれるなら、入籍しない事実婚を条件にOK」と譲歩してきたものの、敏子はあくまで入籍にこだわった。

貞雄は結婚前、「自分の生命保険の受取人を君にするので、財産は相続放棄してくれないか」と相談してきたが、「私は前夫の財産をすべて長男に譲って再婚するつもり。あなたも覚悟を見せてほしい」と迫ると、知人の弁護士に頼んで遺言書を作成し、敏子が財産の大半を相続できるように取り計らってくれた。こうして二人は出会いから半年後、周囲の大反対を押し切ってスピード結婚したのだった。

結婚式こそ挙げなかったけれど、写真館で貞雄が羽織袴、敏子は文金高島田、金の糸で刺繍を施した打掛姿になって写真を撮る。ところがバラ色の新婚生活は長く続かなかった。貞雄が脳梗塞で倒れて入院すると、聡子は毎日のように「結婚した以上、妻として父の介護をしろ」と連絡してきた。冗談ではない。私は夫の下の世話をするために再婚したわけではない、と敏子は考えている。

#### 4

聡子は市山の助言に従い、公正証書遺言書の作成にとりかかった。入院中、顔を見せない敏子に不信を抱く貞雄にも否はない。遺言者が入院中だったことから公証人が病室まで出向き、弁護士や主治医の立ち会いのもと、貞雄本人の意思に基づいて「妻の遺留分を侵害しない範囲で、娘に財産を相続させる」という趣旨の遺言が口述筆記された。

貞雄と敏子の協議離婚が成立したのは、それからほどなくのことである。離婚後、新しい遺言の存在を知らされた敏子は血相を変えて「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた。「困ったことがあれば相談に乗る」と聡子に伝言を託しておいたのだ。

「遺言がいくつもあるなんておかしいじゃない！」

口をとがらす敏子に、市山が突き放した口調で答えた。

「遺言書は何通作ってもいいのよ。法律では最新の日付のものが有効となるの。つまり、新しい遺言によって、古い遺言の内容は取り消されたものと見なされるわけ。離婚したあなたにはもう財産を相続する権利はないわ」

敏子がふて腐れた顔で言った。

「しょうがないわね。それなら財産はあきらめる。どうせ別れた夫はいますぐ死にそうもないし。年金分割の手続きをして、元夫の年金を半分もらわなきゃ」

そそくさと席を立つ敏子を市山が制した。

「年金分割できるのは元夫が厚生年金や共済年金に加入していたあいだ、夫婦だった期間のみよ。元夫の定年退職後に再婚したあなたに、年金が分割されるわけじゃない」

「うそでしょ……」

顔を失った敏子がそわそわして続けた。

「それじゃあ死別した夫の遺族年金をまたもらえるように……」

「あなたの場合、遺族年金は再婚した時点で受給資格を失ってる。再婚相手と離婚したところで、もう元には戻らないのよ」

「そ、そんな。私はこれからどうすればいいの……？」

立ち尽くす敏子の表情が消えていた。まるで能面のようなようだった。

## 5

離婚した貞雄はリハビリを終えて病院を退院後、介護付き有料老人ホームに入所した。本人は自宅療養を希望していたものの、介護が必要な状態で一人暮らしは困難と判断したのである。

再婚を機に自宅を息子夫婦に譲っていた敏子は、息子から「反対を押し切って母さんが再婚した時点で他人だと思っている。いまさらこの家の敷居をまたいでほしくないし、援助もしない」と同居を拒絶されて行き場を失い、結局、家賃の安い公営住宅に入居した。亡夫が残した蓄えはそれほどでもなかったようで、受給できる年金もいまや基礎年金のみとなって生活は困窮を極め、年金支給日前にはその日の食費にも事欠くようになる。市山のもとにもしばしば借金にくる始末で、見かねた市山の勧めによってその後、敏子は生活保護を受給した。

市山と透が様子を見に行くと、軽度の要介護認定を受けた敏子はヘルパーサービスを週に1回利用し、部屋の掃除や洗濯、料理などを支援してもらっている。ただし、近所の住民との交際はほとんどないようだ。

「生活保護を受けていると、医療費や介護費用が免除になるから年金生活の時よりも暮らしはずっと楽なのよ」

目を細めて語る敏子には、再婚した時のようなハツラツさがすっかり影を潜めていた。その帰り道、「死別した夫の遺族年金を投げ打って熟年結婚したものの、再婚相手の介護に嫌気がさして離婚。かくして、いまは生活保護ですか」と皮肉交じりにつぶやく透に、市山が言った。

「熟年結婚というのは年金問題と背中合わせなの。世の中には交際相手と入籍せずに、通い婚の状態で亡夫の遺族年金をもらい続けているシニアもいるわ。彼女はそのへんをもっとよく考えるべきだったのよ」

透が市山の部屋を訪れ、自らの病気を告白したのは数日前のことである。以来、明るく振る舞っているものの、瞳の奥に悲しみが宿っているのを市山は見逃さなかった。透が寂しそうに微笑んで、ぽつりと言葉を漏らす。

「熟年結婚かあ……オレは熟年どころか、一度も結婚しないまま死んじゃうんですね」